
ヒブリオ・ディテクティブ

ばいおり〜ん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビブリオ・ディテクティブ

【Nコード】

N0054BA

【作者名】

ばいおり〜ん

【あらすじ】

本の探偵を生業にする少女、エイミー・シュタットフェルトは、ある事件に絡んで、色々と最強な大司教ルーフェス・チェンバレンに興味を抱かれる。国の背後に潜む巨大な暗黒組織、ガイドの追跡を軸に、時にすれ違い、時に戦い、あるいは協力していく二人は、やがて……。

ヒブリオ・ディテクティブ 主要人物

人物紹介

エミリー・シュタットフェルト

本の探偵をしている。類稀なる天性から魔導書の扱いに長けており、裏では『ナプ書架の守護神』と呼ばれている。

ルーファス・チェンバレン

フナリス王国の国教であるソル教の大司教。神官の中で最強の魔力を保持する。偶然エミリーに出会い、興味を抱く。

P.S.

通称『パウダー・スノー』。エミリーの常連クライアントであり、ホットラインを通じて様々な稀少本レアブックを収集している。資金・人材・情報と、何かとエミリーをバックアップする。

マーガレット・ワトソン

エミリーの友人。王立図書館の司書をしている。魔力も技量も一般人に劣る底辺だが、第六感がずば抜けており、同僚から『確実な妄想D・D』と揶揄されている。

『おはよう、ナブー君。今、話せるかね』

エミリー・シュタットフェルトは毎朝の日課にシャワーを浴びることにしている。今日も例に洩れず、しっとり濡れた白肌から汗を流し取っていた。肩で切り揃えた金の柳髪をゴシゴシと洗液で泡立てている。さっぱりと洗い流した顔は、生きたビスクドールそのものだ。穏やかな水を湛えた二つの泉が初雪の上に輝き、すつと通る鼻梁の下に桜が咲いている、としか表現できない。少し控えめな胸は、まだエミリーがうら若い少女である事を示唆しており、細い腰としなやかな太ももは、常に体を鍛えている恩恵だった。

さて、一人の子供の水浴びなど描写に特筆する事は本来ないのだが、一点だけシャワールームに奇妙な違和感があった。声を出す古びた本が、天井あたりに浮いているのである。しかし、エミリーは全く驚きもせず、起き抜けの気だるそうな声で返事をした。

「おはよう、P・S。せめて三十分後にしてほしかったわ。私が今していること、わかってる？」

『うむ、室内に響くような水音からして、水浴びの最中だったか。失礼、ナブー君』

「構わないわ。用件、話してちょうだい」

盗聴の可能性を考慮して互いに偽名で話す理由は、少女とクライ

アントが取引する商品が大変貴重な品であるためである。P・S・は通算八回、総額にして政府が備蓄している宝石と天秤に掛けられる依頼料を払っている。

ざつと頭にもう一度シャワーをかけ、白い泡を丁寧洗い落とす。時折弾けた水滴が魔導書が水にかかるも、まったく湿気ずに水滴を弾いている。魔導書は特殊なコーティングが施されており、暖炉の火にくべても雷に打たれても傷一つつかない。

『今回は、少し特殊な依頼になりそうだ。依頼内容は、昨日宮殿の蔵書から奪われた国境図画を搜索し、オリジナル、コピーを問わずに回収する事。いつものように、のんびり珍しい本をコレクトしたものだよ』

洗い終えた髪を両手で後ろにやり、気だるそうな雰囲気から、ぴりりと痺れる雰囲気変わった。

「ずいぶん荒事になりそうね。経緯と現況を詳しく教えて」

タオルを肩にかける少女の後ろを、魔導書がふよふよとついていく。

『どうやら侍女一人と近衛兵二人が隣国アストラスのスパイで、上手く蔵書の隠し場所を見つけたらしい。幸いだったのは、蔵書の管

理人がたまたま荒らされた直後に忘れ物を取りに戻ったことと、記憶力がずば抜けていたことだな。三人は捕まり、首都は十分に封鎖された。これで、絵画を持っている人間は首都から出られなくなつた」

「でも、私に話を持ってくるんだからまだ見つかつてないんですよ。本来、下手人を捕まえるのは兵士と警吏だもの」

「この地理によほど詳しいのだろう。あれだけの兵を投じて見つからないのだ。ただ、このまま何日も首都を封鎖にはできん。特に商人はお冠だ」

「そこで、私の能力の出番、と」

「君の”検索”は秘密裏にしておくのが得策だと私は思うのだがね。私も国に関わる人間として、経済封鎖はよろしくないと判断したのだ。不本意だが、君の協力を要請したい」

「わからないでもないわ。要は気づかれなければいいのね。追い詰めた犯人の王手として」

「その通り」

犯人がうろつろしていたら安心して本も読めないしね、とエミリーは思った。読書中毒のエミリーがビブリオ・ディテクティブ本の探偵をしている理由は、彼女の天賦の才能、”検索”にある。

あるテキストがあるでしょう。それは、本でも新聞でもチラシでもいい。誰かが、もしくは何かの機械が書いたものならどんなものでもエミリーがタイトルを知れば、そのテキストの位置と所有者のプロフィールが顔写真付きで脳裏に浮かぶ。書きなぐったメモなどタイトルがない場合でも、誰々のこういう内容のメモ、とエミリーが特定できるだけの内容を知っていれば、やはり能力は適用される。所有者がいない、もしくは故人の場合、最後の所有者がモノクロで

表示される。また、脳の処理を軽減するために、欲しい情報だけをピックアップし、雑多な情報は無意識に排除されるようになっていく。エミリーはこの能力を駆使して、一冊で小さな町が買える稀少本を苦もなく探し当て、半信半疑のクライアントを驚かせてきた。

エミリーは人当たりの良い明るい性格だが、自分の秘密の能力を明かした人はP・Sと親友のマーガレットだけだ。知られて不気味がられる反応をエミリーが恐れたからだ。それに、たとえ自分が悪意で利用しようと考えたことがなくとも、人は万が一の可能性を恐れ、排除しようとするだろう。エミリーは同期の魔術学校生の中で三番目の魔力量を持ち、優れた技術を持っているが、国家に対抗できるとは思っていなかった。己の力量を見誤る者は墓石に埋もれる事を、エミリーはよく知っていた。

エミリーは赤いTシャツの上に浅葱色のジャケットを羽織り、群青色のホットパンツからすらりと長い足が伸び、白い肌をアクセントにした黒いブーツを履いた。この時代にしては、先鋭的な衣装だ。時代を先取りするような服を着ているのには、ある男が関わっているのだがそれはまた別のお話。

「ちゃんと色付けてね。可憐な女の子を戦場に放り込むんだから」
『君のような戦闘能力を持った子供を果たして可憐と呼んでいいのか議論の余地があると思うのだが』

「そんな事言ってる、女の子にモテませんよ」
『生憎女性と付き合えそうな身分ではないがね』

「そこは紳士らしくやんわり返すのが美学じゃないの？」
『ふむ、そうかね。ああ、言い忘れていた。この頃ガイドの活動が

活発になっている。軍や警吏も信用しないのが身のためだ』
「『忠告ありがとう。それじゃ、探してみるわ』」

カツカツと玄関に向かい、エミリーは扉を開けて外に出た。扉が閉まる瞬間には、エミリーは外の景色に溶け込むように透明になり、ガチャリとひとりでに扉に鍵がかかった。

ファナリス王国の積層都市、ドラベルクには何百年と積み重ねてきた改築の歴史があり、中心から徐々に都市を広げていった経緯がある。特に最初期の頃は計画的に建築されていなかったために、積み木をゴテゴテくつつけた、粗悪な迷宮のような構造が地下に埋もれていた。イタズラ好きの子供が浅い階層を探検するくらいで、闇に包まれた旧市街地を探検しようとする者はそういない。始めは浮浪者やチンピラの溜まり場だったのが、昏い水底に汚泥が積み重なるように、あらゆる犯罪者の隠れ蓑となっていた。

いつしかそこには、闇を好む人間達が集う、もう一つの秘密の地下街、^{ノクタン}宵闇となっていた。盗品が競売にかけられ、横流し品が流れ着き、仮面を被った人間が奴隷を買っていく。奴隷の買い手は、ペドフィリア・カニバリズム・ネクロフィリアなど、まともな連中ではない。年端も寄らない子供を鮮魚のように捌くショーが行われるような凶行が毎日行われているのが、この街の裏の実態だった。

これほど大規模な闇街になると、それを取り締まる人間にばれない道理はない。地下都市の存在を知る警吏や軍には、人間界全体に影響力を持つ国際的マフィア、ガイドから巨額の賄賂が渡されており、まともな機能を果たしていなかった。それどころか、軍の上層部はガイドの幹部になっており、武器と黒い金が彼らの懐を出入りしている腐敗っぷりだった。近頃はガイドの魔の手が宗教の深部にまで及んできていると、まことしやかに囁かれている。

そんな地下都市に忍び込んだ男、ルーク・ホーネットは、手に大きな長方形の風呂敷を持って壁の死角に座り込んでいた。昨晚、絵画の行商をしていた男は、宮殿で処分品の絵画を一枚受け取り、翌朝には首都を出る予定だった。しかし、その後すぐに首都が封鎖されてしまい、街道の一区画ごとに兵士が調べているという厳戒態勢に入ってしまったために、宿の裏路地の枯れ井戸に入り、そこから脱出できないか探ることにした。アストラスの商人組合は時間に厳しい。一日でも納品が遅れると、収入が四割も落ちてしまう。不審な動きをよそに見せたら、自分を疑ってくれと叫ぶようなものだと気づくはずだが、ルークは目先の損失にパニックを起こしていた。おっちょこちょいのルークが焦るのも無理はなかった。

だが、もともとこの男はあまり方向感覚が良くはなく、散々迷った拳句、とんでもない地下空間に出してしまったのだ。芯から冷える地下通路の脆いレンガ壁に背中をくっつけて、薄明るい広間の様子を凝視する。

円形の広場にみっちり人が座って、中央に釘付けにされている。一体何を見ているんだ、と背伸びして覗き込むと、地獄の光景が視

界に入ってきた。幻聴も聞こえてくる。

「や、やめてくれ。細工職人は親指が命なんだ。金はすぐに払うからアアアああああああ！！！！」

「嫌だ嫌だ、お願い殺さないで。なんでもするから……」

「この鬼畜、外道、下種野郎！！あんた達なんて地獄に墮ちろ！！！！」

鎖につながれた裸の奴隷達が一人ずつ、見せしめのように中央で拷問されている。見世物のための奴隷たちが凄惨な死ぬ様を、仮面をつけた観客はケラケラと笑っていた。正視に堪えぬ映像と、身の毛のよだつ音声にルークの胃が決壊し、盛大に吐いた。

自分はただ商売の都合で奇妙な絵画を運んでいただけなのに、なぜこんな目に遭わないといけないんだ、と自分の運命を呪っていた男は、自分が辿ってきた地下通路の暗がりからカツ、カツとゆつくりとこちらに迫ってくる音を聞いた。あんな奴らに近づきたくないもしかしたら、あの奴隷と同じ目に会うかもしれない。空回りする思考が男を逃走に導いた。壁の向かいにある横路地に入り、鼻水と涙と吐瀉物にまみれた顔を小汚い袖でぬぐいながら、ひたすら走る。

顔、顔、顔。脛に傷のある下劣な男の洪水に嫌気がさす。露天の食指を動かす臭いですら、苛立ちを強くさせた。ここでは、何の肉を焼いているか知れたものではない。とにかく出口を見つけなければ、いや、そこにしだって結局は地上に出るだけで何もできない。頭の中で思考は空回りし、自分がどこまで走ったか、あの足音さえ

「質問その一、あなたはその絵画の意味を知ってる？」

なぜ盗んだか、とは問わない。問題はこの男が、絵画を見て意味ある情報を得ているかどうかにかかっている。男はただとどしく答えた。

「ヤギと熊と獅子が森の泉をはさんで向かい合っていて、泉の中にいる沢蟹が木から落ちた梨に鉄を伸ばそうとしている、古代ルーアン文明の創世記『エル・ドラド・アシム・カマハール』の一節を描いた絵なんだろう？俺には歴史的意味も歴史的価値もさっぱりわからんが、お偉いさんにはたいそう高価なものらしい」

顔の見えない少女は、しばらく無言のままだった。男は、臍を背中から引っかきまわされている感覚に陥った。すっからかんの胃がきりきり痛む。

「質問二、あなたはこの街をどう思ってる？」

「狂ってる。俺が住んでいる町だって、ここまでイカれてはいない」

それは、心から思ったことだ。自分は薄汚れた人間だとは自覚しているが、この街だけは激しく嫌悪した。一瞬それも薄らいでしまったが。

「……よかったわ、あなたがまだ普通で」

よく聞けば、本当に清純で明るい声だった。こんな腐臭と臍物に彩られた地下に、一輪の白い花が咲いているとは夢にも思わなかった。

「もし、ここを少しでも懐かしいと思ったら、あなたは戻れなくなっちゃうから」

首筋に当たる冷たい感触がなくなり、男はどさつと床に手をついた。緊張がいつきにほどけてしまったのだ。ぜえぜえと呼吸し、じつとりと濡れた汗を手でぬぐって振り向くと、そこには美の女神がいた。しばらくあっけに取られた男は、とっさに美しいと声を漏らしてしまった。少女はその様子を見て、くすりとほにかんだ。

「まさか、こんな綺麗な女の子だったなんて」

「ありがと。素直に誉めてくれる人ってなかなかいないのよ」

「はは、いやだな。俺がそんなに紳士に見えるか。ただのしがない画商だぞ？」

「そんな事ないわ。あなたは嵌められただけだし、今も二つの組織から命を狙われてるもの」

いつから気楽に話してるんだろう、と不思議に思いながらも、男は組織が一つ余分な事に気づいた。

「誰が狙われてるだつて？」

「あなた、商人に向いてないわね。愚かしいぐらい正直すぎるわ」

「誠実つて言え。ガキが生意気言っくんじゃない」

「生意気も何も、愚直なんだから仕方ないじゃない」

どうやらまだ自分がしでかした重大さに気づいていないらしい。
少女は男の鈍さに呆れて、首をげんなりと下げた。

「あなたはアストラスに利用されたのよ。その絵画はただの絵じゃなくて、アナグラムを織り交ぜた絵画なの。国家の最高機密に分類されてるから、あなたが狙われるのは当然なのよ」

「そ、それじゃあ、俺に受け渡した奴らはアストラスのスパイだったのか。だとしても、なんで腐るほどある絵画から一点消えた事に、あれほど早く気づいたんだ」

「一言で言えば偽装が下手くそで、偶々活動時間外に司書が見回りしていたから」

自分がこんなくだらな絵画と杜撰な工作で死んでしまうなんて、と悲嘆に暮れていると、男の額にバチンと少女の中指が炸裂した。

「痛っ……！！」

「今を悲しむより、明日を楽しみましょう。生きてここを出られたら、デートしてあげてもいいわ」

「ほ、本当か？俺の名前はルーク。ああ……」

「ナブーと呼ばれてるわ」

明らかに偽名を名乗る少女の後ろに小さな真っ白い毛むくじゃらが二匹浮いている。なんともラブリーな光景に、男は頭がパンクしそうだった。

「じゃあ、お嬢ちゃん。その毛玉は何だ？」

「この子は【セーフホーンオウル界を記す角鷹】と【ロートオウル界を読み取る梟】って言うのよ。お友達になってくれるかしら」

よくよく見れば、左は小さな耳をふさふさの毛からぴよこんと出し、右はそれがない。額にはそれぞれルビーとサファイアの宝玉が嵌め込まれており、どちらもパサパサと一生懸命飛んでいる。

14

「なんで毛玉なんだ」

「ほら、よく小説でもあるでしょ。魔法少女をサポートする小動物的マスコットがいるじゃない」

「頼りなさそうだな」

羽に埋もれた二羽がルークに近づくと、突然額の宝石が輝きだし、二羽の体が驚くべき変容を遂げる。ルークの身長を裕に上回り、その翼は広げるだけで敵を威圧し、白い羽毛は刃物よりも鋭く衝撃にも強い攻防一体の武器となり、闇の中を千里見渡す強靱な視力と聴力を持つ。黄玉の瞳は下賤なる者を平伏させる眼力を帯び、凜々しい雄姿は神の使いにふさわしく、傍にただで勇躍が奮い起こさ

れる。

「貴殿がマスターのパッケージか。いかにも平凡な御仁と見受けられる」

「貴殿をバックアップするのは本意ではないが、これもマスターの命。必ず生かして地上に送り届けようぞ」

「猛禽類に馬鹿にされたのは初めてだ」

「この子たち、ちよつとプライド高いけど素直で従順よ。ねっ、ミーちゃんとフーちゃん」

「「ギキヤー！ー！！！！」」

「ギヤツプありすぎんだろ。お前ら」

ルークがつつこまずにはいられなかった二羽は、もちろんれつきとした雄である。本人はマスターのネーミングに異を唱えるつもりは全くゼロのようだ。

「そうそう、この子達は動物じゃなくて魔導書の守護獣よ」

あんまりな理不尽に言葉をなくしたルークは、己の頬をパチつとたたいた。守護獣とは、本来魔導書の知識を封印するための異形の化け物だ。それ自体が立体魔方陣である魔導書を平面の字面を追ったところで理解できるはずがなく、魔導書のアクセスキーを唱えて『狭間の世界』に導かれる。そこで知識を封じる守護獣と戦い、打ち勝ってはじめて知識をダウンロードできるのである。魔導書には原本と写本があり、原本は人間には破壊不可能で、写本は知識の継承者にのみ創造できるようになっていく。守護獣のランクは魔導書の凶

悪に比例してF〜Aの六ランクに分類されており、Aクラスはさらに五等から一等まで区分されている。

だが、知識の継承者として守護獣は使役できるはずがない。そんな無茶が通れば、とつくにこの世は地獄になっている。

「そっぴゃ、俺が誰かに狙われてたんだっけ。王国軍だけだろ？」
「うっん、違うわ。王国軍とは別に、ガイドからも命を狙われてるわよ」

「ガイド、だと……!?!」

六世紀前、世界がひっくり返る聖魔戦争が起こるさらに昔、神秘溢れる神代から続く人間界最古にして最大の機関、その名もガイド。それを敵にして逃げ切れる事は人間界では不可能だ。男はおぞましい未来凶を垣間見て、手がブルブル震えた。

「まだ顔割れてないんだし、今なら大丈夫でしょ。向こうも面子があるから公にしたいくないみたい」

「だ、誰が大丈夫だって!?!あんた正気か。世界相手に勝てっこないだろ」

「御仁はマスターを侮辱しているのか」

「全面勝利は私にはできないけど、負けない自信はあるわ。それに……」

鋭い弓鳴りと共に、青白い光の矢が少女の背中に突き刺さる。矢

の先端から白い霧が噴出し、辺り一帯を氷漬けにしようとする。地下通路の暗がりから黒いフードをかぶった男達がぬっと近づき、対象を捕縛できたか確認しようとした。

しかし、彼女の背中に当たる直前に光の矢が白い炎に燃やされ、その炎が白い蛇を具現化した。彼女の影から紫電がバチバチと走り、明滅する影から白い馬が現れた。

「どうも、あちらからダンスの申し出が来たみたいね」

初手を完全に防がれたことに彼らは驚いたが、すぐに冷静になる。

「防がれたか。貴様、魔術師だな」

「ふふ、ここから逃げられはせんぞ。その絵画をこっちに渡すんだ」
「なにやら奇妙な召喚術を使っているようだが、無駄だぞ。生娘」

しゃべってる暇有ったら攻撃しなさいよ。三流なんだから。

彼らのセリフを左から右に流して、エミリーは白蛇と白馬に命じた。

「【万物を燃やす蜥蜴】、【猛り狂う突風】。私に力を貸してくれ
る？」

二頭の動物は首を縦にうなずき、少女の体に飛び込んでいく。そのまま彼女と融合し、光が爆発した。

全身が白い陽炎となり、少女を中心に竜巻が立ち上る。その神々しさに黒いフードの男達は、警戒するように身構える。自分達が見たこともない魔法を使っているからだろう。男達は久しぶりに殺し甲斐のある敵だ、とにんまり笑い、懐から銀の環十字を取り出した。そのアイテムにエイミーは少なからず動揺した。

「まさか、貴方達……!!」

「そのまさかだよ。こんな所で神官に出会うなんて初めてだろうな」

【異教徒を誅する第五の雷斧】

【異教徒を誅する第四の氷矢】

【異教徒を誅する第三の水槍】

【異教徒を誅する第二の炎剣】

【異教徒を誅する第一の風扇】

計十五人が三人ごとに一つの呪文を紡ぎ、詠唱の高速化を図ったようだ。いくら少女が変わった魔法を扱おうと、これだけの攻撃をくらえば絶対死ぬ。数多くの人間を抹殺してきた神官達は、そう侮っていた。じりじりと神官に近づく少女に、建物一つを丸々吹き飛ばすほどの威力を込めた聖術が襲い掛かる。少女は当たる直前に体をかがませ、世界を変えた。

文字通り雷速で飛んでくる光の斧の柄を左手でつかみ、その運動を体軸の回転に利用して魔術師に投げ返す。心臓をピタリと狙ってくる必殺の矢を一瞬で溶かし、飛んでくる薄い空気の刃をかく乱し、水の槍を蒸発させる。炎の大剣が少女を真つ二つにしようとするが、素手で捕まれて鉛細工のように握りつぶされた。

「まあ、相手が悪かったとしか言いようがないわね。十万三千冊の魔導書を修めた私に叶う者なんていないわ」

神官は尋常ならぬ事態にビクツと体を震えさせる。ルークは、自分を庇って前に陣取る白梟フーちゃんに耳打ちした。

「十万三千つて、ホントなのか」

「阿呆、嘘に決まっておる。魔法をまともに扱えるのは五歳からだ。マスターは今年で十五ゆえに、毎日読んだとして一年で二十九冊修めないといかん。一般的にエリート魔術師が生涯に五冊修めれば天才と呼ばれておるから常識的に有り得ぬ」

「だが、マスターは例外の例外で、十年間に十三冊修めておるぞ」

ルークは眼前に広がる炎と雷の嵐を呆然と見ていた。おそらく増援を呼んだのだろう、黒いフードの魔術師や王国騎士の制服を着た剣士や弓師、槍使いとわらわらなだれ込んでくるが、誰もかれもが鎧ごと千切りになったことに気づかず、血が噴き出る前に白い炎と雷で完全に消滅する。少女の動く軌跡が一種の芸術であり、それを言葉にもせず感嘆に打ちのめされてしまった。

「俺は生きて帰れるのか」

「我らを呼んだ時点で生存帰還は確約されたも同然」

「惜しむらくは、御仁の守護が最優先で戦闘に参加できんことよの」

一方的な蹂躪は終わったようで、白い陽炎の少女は陽気に手をひらひらした。焦げ臭い部屋に鼻をむずつかせてルークが近寄ると、少女の体から光が消えて数瞬守護獣と分かたれて魔導書に戻っていく。淡い燐光と縦横無尽に踊る魔法陣が一冊の黒い魔導書を召喚し、起動させた。

「こんな地下深くだと地上に出にくいものね。手っ取り早く跳ぶわ」

一体この魔導書の製作者は、何を考えてこんな守護獣を作ったのか。どす黒い艶やかな体毛に禍々しい赤い瞳を輝かせ、長い耳が腕のようにあちらこちらをヒクヒク動かしている。その小さな口を開くと、堅牢な石を削り取る白く長い前歯がざらりと生え、初対面のルークを寄せ付けないよう警戒心を剥き出しにしている。重力に軽々と抵抗できる弾力のある後ろ足で勇ましく立ち、それに比して小さな腕に胴ほどもある懐中時計を抱いていた。

「ディグ・ラビット【穴掘り好きな黒兔】よ。兔は穴掘りが大好きでしょ」

鼻をエミリーの踝にくっつけ、ヒクヒクしてクシヨンとくしゃみをした。

「俺達は狭苦しい兎穴を通り抜けるのかい。ケツで引っかかるぞ」
「この子は物理的な穴は掘らないわ。代わりに遠隔地を直接繋ぐパイパスを構築するの」

規格外にも程があるだろ、とルークは口に出さずに呆れた。魔導書を修めたらここまで人間離れするのだろうか、と尋ねると、「人間技じゃあ制限が大きいだよ。だったらエキスパートの守護獣に任せた方が効率的でしょ」と、エミリーが黒兎と魔法陣を構築しながら答えた。瞬く間に膨大な魔法陣が完成し、検証を手早く済ますと、エミリーはルークの手を引っ張って陣の中に立たせた。ルークは初めてみるエミリーの不思議な服装に、特に大胆に魅せる白い脚に息を飲んだ。あと二、三年成長すれば、大輪の華になるであろう幼い美の女神を前に、ルークは一度ぎゅっと目を閉じた。命の恩人にほんのわずかでも鼻を伸ばすのを、ルークの良心が激しく咎めたからだ。

「私の家に繋ぐから、私の手を握って。初めての人は酔うから気を付けて」

ちらつとエミリーを見ると、目があった。

ぞくつとする程澄んだ蒼玻璃がルークの心を鷲掴みし、奥底を引っ掻き回している。この少女は純粋な絵の具の白なのか、光をまぜこぜにした混沌の白なのか、判別がつかない。清純な表面は、黒く

どろどろに煮えたぎる内側を巧妙に隠しているのかもしれない。否定、疑念、肯定、信頼。渦巻く思考の渦が、たった数秒間を永遠に感じさせる。

「完了したわ。踊りなさい、デイグ」

アウイス・テズラエ
【方舟の神門】

エミリーを始め、ルークや守護獣、浮いている魔導書の真下に小さな魔法陣が出現し、燐光と共にこの場所から消えていった。

暁が上ると共に鐘を鳴らし、ソル神を讃える祈りを歌に捧げる聖ファナリス大聖堂は、常に厳粛な静謐を保っている。煌びやかな王宮とは異なり、必要以上の装飾を取り除いた石造りでできている大聖堂から歩いて十分の場所に、法皇の邸宅があった。その一室、畳の敷かれた部屋で、二人の男が立てかけられた蠟の火に照らされて、障子に妖しい影を落としていた。

「どうだね、この渋みのある茶器が実に味わい深い。この感性の鋭さは金千斤よりも価値がある。そうは思わんかね」

「はあ……」

この東方かぶれの法皇セドリツク四世に苦勞している人が一人、ルーファス・チェンバレンが忸怩たる気分です座をしていた。極東の慶の国から無理矢理連れてこられた母親から受け継いだ艶やかな漆黒の髪を腰まで伸ばし、ほっそりとした全身に加えて中性的に感じられる面立ちだった。目元だけはファナリス出身の父に似て、柔らかな翡翠の瞳を白磁に填めていた。

ルーファスは人一倍真面目な分、徹底的にしようとする癖がある。法皇の引き継ぎの際に大司教に昇格し、こうして法皇の自宅に上がる理由が、ただ母の血をひいていたから、と周りに囁かれるのが不快でならず、自分の実力と信仰心の賜物であると認めさせるために、尚一層厳しい礼拝を積み重ねていった。神官の頃から持て余していた神力も十全に扱えるようになり、名実最強の聖術使いになった。

聖術と魔術の違いは簡単で、聖術は天界に満ちる神力を肉体の器で精製して術を発動させる技であり、魔術はその行程を魔力に置き換えた技である。どちらに向いているかは個人差があり、力を入れる器の大きさは生まれつきによるものだ。

そして、重大な点は人間自体に魔力や神力を直接扱う力はない事だ。聖術はソル神に器の神力を祈りで術の形に変換して行使し、魔術はルナ神に器の魔力を契約で術の形に変換して行使する。

また、似通った点の多い二つの術は、どちらも要求が大きいくらいほど代償が大きくなる性質がある。詠唱術程度ならば、精神の疲労度が蓄積する位だが、高位の天族や魔族の召喚術や神話級の儀式術になると、術者の魂と生け贄を必要とする。

勿論大規模であれば、失敗も起こりやすい。過去にも王族の女を全員生け贄にして天族を召喚して敵国を滅ぼした国があった。だが、その天族は敵国の魂だけでは満足せず、生け贄をさらに要求した。すぐに従わなかったから、その国も信仰が薄いとみなされ、結局その国も首都が壊滅してしまったそうだ。

さて、実際は敬虔で質実剛健を体現したルーファスは異彩な面持ちも相まって女性神官から人気が高く、男性神官は、羨む人氣に複雑な気持ちに向けていれども、実力的に強く信頼しており、殆どは外見で見下してはいなかった。そんな事はつゆ知らず、いまだに

見くびられないように振る舞いに気をつけているルーファスは、事情を知れば滑稽に見えるかもしれない。

だが、それとは別にルーファスは心臓を締め付けられる思いで畳に座っていた。

「お言葉ですが猊下。その感性を量で評価するのは不適切だと拝察します。さらに言わせてもらえば、私は猊下の蘊蓄を拝聴するために参上申し上げたのではございません」

微かに眉を吊り上げたセドリツクは、短くため息を吐いて縁側から立ち上がり、畳に敷いた赤い絨毯の上に置かれた円卓に足をぎこちなく運んだ。腰を悪くした法皇は頂上にある聖堂に通いづらくなり、自宅で療養する日々を過ごしていた。

胡桃でできた椅子のそばに立っていたルーファスは、法皇に許しを得てから背筋を伸ばして座った。金の刺繍が施された白い法衣の皺を神経質に伸ばしている若い大司教を、法皇は口元を左手で隠してほころんだ。

「昨日、宮殿から盗まれた絵画の件で、誠に残念な事に王国軍と神官が犠牲にあつたようです」

「犯人はそこまで手練れだったのかね。腐っても神官だ、それなりに力があるだろう」

それは……、と言いよどむルーファスは、重々しく口を開いた。

「軍の調査によると、地下水路で犯人との戦闘が起こり、遺留物から身元不明を含めて推定七十五名が死亡。内、神官は十三名で、重傷が先ほどの神官の二名です。大司教の権限で二人に面会し、状況を確認しましたが、二人はパニックになって幻覚を見たようです」

白い火と雷を帯びた金髪碧眼の女が白い鳥を召喚し、一瞬で我々を無力化した、と。

「動物の正体は判然としませんが、共犯の実力はこれでおおよそ見当がつきます」

繊細に編まれたハンカチに包まれた物証を袂から取り出し、円卓にそつと置く。そこには、粉々に砕けた銀の環十字　十字に円を重ねたモチーフ　が乗っていた。セドリツクはそれが何を意味するか察知し、眉間に皺を寄せる。

「これは生存者から押収した物です。聖別した銀の環十字が完膚無きまでバラバラに砕けています。神力の残滓が全く感知できないので、聖別によるソル神の加護が食い破られたと考えられます」

聖別は聖術の基本にして核心であり、それを魔術で破るのは容易

ではない。聖術は魔術と相反する力で対消滅するのが原則だ。聖別は、並みの術者でも効率的に聖術が使えるように、術者の器を他の術者の器にリンクさせる神力のライン形成術で、環十字一つ一つに十人の神官が聖別でリンクしている。環十字の聖別を破るには、まず魔術による干渉で十本の神力のラインを強引に断ち切るしかない。単純に十人分の神力の束以上に、十本の神力の糸を一カ所で玉結びした塊を魔力で切るのがどれほど厄介か。

「……たしかに危険だな。看過できん」

「ええ、同感です」

「だが、世俗に疎い神官の私のもつと気になるのはそこではない。なぜ地下深くの水路で犯人と戦闘が起きたのか。そこで神官が死ぬ道理はあるのか。犯人を追い掛けるのは軍と警吏であろう。偶々そこに多くの神官が居合わせるなぞ有り得るのかね」

法皇や年配の方はいざ知らず、若いルーファスは地下都市の黒い噂を耳にした事がある。ごろつきが溜まって治安が悪く、神官が一步入れば身ぐるみ一枚剥がされる危険地帯だから近づくな、と昔に先輩神官が警告していたのを思い出した。もっとも、礼拝に明け暮れたルーファスは神殿から年に三度も出たことがない。

「まさか神官がガイドに関わっていると」

「可能性はある。強靱な精神を持たぬ者は邪な力に屈してしまう。かつて私の友の神官も一人、ガイドに堕ちてしまった」

年季を感じさせる痛切な眼差しで縁側の石の庭を寂しげに見つめ

ていた。法皇は慰めるように、蔓草を浮き彫りにした時計を提げたペンダントを親指で撫でていた。カチツと蓋を開けると、蓋の裏に穏やかな笑みを浮かべる少し若いセドリツクと、人形のように表情の欠けた女の子が一緒に写っている。

「その方はどのように」

「私が自ら彼の魂を救済した」

君も同じ運命を辿るやもしれんぞ。

ルーファスは暗に警告した法皇の訓戒を肝に銘じた。

「謎の女と地下都市、両方の側面から探ってみます」

「命は大事にしる。もしかしたら、これも氷山の一角やもしれん」

コチコチと時を刻む懐中時計を一瞥した法皇は、腰で微振動する通信スフィアを起動した。スフィアが鋭く回転し、透明な球の中央で青い光が収束していく。その光が、球上に法衣を着た人間の立体ホログラムを投影し、法皇にしか聞こえない言葉で幻影が早口にまくし立てていた。しばらく喜んでいた表情が次第に曇っていく表情を、ルーファスはおそろおそろ見ていた。一礼した幻影が球の中に沈んだのを見て通信スフィアを閉じた後、法皇は目頭を長く押さえた。この頃の異常事態の連日に疲れが溜まっているのであろう。

「良い知らせと悪い知らせだ。絵画は無事に取り戻したそうだ」

「それは良かったです。コピーの危険性は残りますが」

「昨日今日で精密なコピーを取るのは魔術を持ってしても至難の業だろうな。それに、今から話すのは法皇と王族しか知らぬ情報だ。

あの絵画は魔導書の変則型で、あれを理解するには絵に隠された三重の暗号を解読してアクセスキーを組み立て、絵画を守護する化け物と戦わねばならん。それも、絵画の制作時期は神話時代の超骨董品だ。まず一日で写本は作れん」

とりあえず事件が一件落着した、とルーファスは安堵したが、犯人がまだ捕まっていないのが心のしこりとなって残っていた。

「奇妙なことに、王宮に匿名の普通郵便で郵送されたらしい。おそらく逃亡した犯人が送ったのだろう」

「ますます犯人の意図がわからなくなりました。どうなっているのです」

「おつかない軍に追い掛け回されたくなくて、首都の封鎖が解除されるように仕向けたに違いない。顔が割れていないのだから、封鎖がなくなれば身分証明などいくらでも偽造できる」

商人組合の人相表も、事件が解決しているのに軍に回すこともあるまい。犯人を特定する時間を与えずに、こちらから犯人の逃げ道を用意していると考えると、掌に踊らされていたようで大司教の癩に障った。拳をぎりりと握り締めると同時に懐古的なウォルナットの椅子がミシッと軋み、テーブルの砕けた環十字がカタカタと震える。大司教の背中から溢れる神力に反応して、神気が部屋中を満たしていく。だが次第に、殺気立つ神気を穏やかな神気が覆っていつ

た。

「それほどの理由で人がたくさん殺されてもいいのでしょうか」

「それほどの理由があるならまだ良い。本当に理由もなく殺される者もごまんとおる。神に仕える者は、過去の怨恨を引きずってはならん。君は神官が巻き込まれた原因調査に集中するのだ」

「ご無礼申し訳ありません」

「君は妙に考えすぎる、いや、生真面目な気があるからな。この件は『神の狗』の責任者である君に一任する」

ふふふと法皇が笑い、すぐに笑みを消した。

「通信が入る前は、君に二人の神官をもう一度丁寧に問いただしてもらおうと思っていた」

「は、はい。私が責任を持って処断しようと思います」

「だがもうその必要はない。病棟で治療を終えた二人の神官の容態が急変して死んでしまった。生き証人は、もはや犯人しかいないのだよ」

夜も更け、家々を灯す幻灯ファンタスティックがじんわりと蛍色の光を放っている。

既に首都の厳戒態勢も解除され、溢れ出す人の流れを窓から眺める者たちがいた。成り行きで人を助けたエミリーと不幸中の幸いで命拾いしたルークである。鼻を赤くしたルークはぼんやりと人が行き

交う夜の街を見て、いまだに自分が生きているのが信じられず、ずっと夢見心地だった。

「放心状態もここまであからさまだと面白いわね。花も料理も忘れる程なの？」

はつと意識を目の前に戻すと、ルークの向かいにはエメラルドグリーンのイブニングドレスを着て、ワイングラスを片手にくりくりとした目でこちらを見つめるエイミーがいた。テーブルには、スモークサーモンと小海老のサラダ、野菜スープ、牡蠣とオーマル海老のグラタン、お口直しのラズベリーシャーベット、ヘレ肉のステーキ、シュトーレンを載せている器が置いてあった。自分が着ている紺のタキシードもルークに見覚えがない。否、あるにはあるが、まるで夢なのだ。

「これ、お前が作ったのか？」

「まあね。花嫁修業の一環で人並みには」

エミリーの定義する人並みは、宮廷料理人の中堅を指すらしい。丹精に造形に凝り、それでいて過度に主張しない。

「普段はやる気ないから、パスタとか缶詰めで済ませるんだけど」

自分の料理に贅沢を与える気はないようだ。ルークが部屋を見渡

すと、センスの良い調度品が周りを囲んでおり、窓から見て、家は第二居住区の高級住宅の一つだ。

ファナリスは城壁を仕切りにして居住区を決めており、王城、神殿、六天貴族と呼ばれるファナリス建国に貢献した貴族の屋敷を第一居住区に。第一内壁の外に一般貴族と名誉貴族が住む第二居住区、第二内壁の外に都民が住む第三居住区、外壁に隣接する、都民の資格を持たない一時滞在者、解放奴隷が住む第四居住区がある。さらに、外敵や火災の封じ込みと兵士の速やかな運搬を目的とした連絡用城壁が第一居住区を四等分に、第二を八等分に、第三を十六等分に、第四を三十二等分に区分している。居住区は小高い山を螺旋を描くように建てられ、居住区間の落差は平均で三十一・一米である。地盤は安定しており、記録上の地震は存在しないため、今まで戦争以外で、建造物の大崩落が起こった事はない。

「召使いがいるのに料理してくれないのか？」

ルークが反論すると、エミリーは手をパタパタ振った。

「違うわよ。私、魔術師だから家事を自律人形オートマタに任せてるの。洗濯とか掃除とかはできるけど、料理になると設定が複雑すぎて。千年経とうが料理は人間にかなわないでしょうね」

口に入れると、どれも絶品だ。一体誰に教われればここまでになるのか、ルークは気になった。

「これ、誰に習ったんだ」

「昔、お世話になった人が私に色々教えてくれてね。宮廷料理長とも仲が良くて、その誼で少し」

小さい時に育ててもらったのだろう、その人から独り立ちしてここに住んでるのか。ルークの推測は羽を伸ばしていく。魔術や料理、見た感じドレスの着こなしも作法も完璧。魔導書から召喚獣を出せ、都市全体に展開している対転移結界を無視して第四居住区の地下から第二居住区の邸宅に転移できた。

だが、貴族で独り身の女性がファナリスにいるだろうか。隣国の商人のルークにはこの国の詳細は知らないが、一般貴族はファミリ―を常に構成するはずだから、妾腹の子で追い出された口か？名譽貴族はレアケースだ。ファナリス関連の本に、戦争の論功行賞か、世紀の大発明みたいな特別な理由で国王から賜るしかない、と書いてあった。

「お嬢ちゃんは何者なんだ？」

エミリーは、ナイフとフォークで器用にステーキを切り分け、一口大をあむつと食べた。至福な表情は決して嫌らしくなく、むしろ可愛らしい。

「そうね。一から話すとややこし過ぎて朝までかかるけど、一言で要約するなら、忌み子、かな」

沈痛な感じがしないので、ルークはあまり深刻になれそうになれなかった。これは、ルーク自身も口減らしの犠牲者であった事にも起因する。ルークは、エミリーがどこかの貴族の隠し子が妾腹の子で、追放されてから誰か親切な人に育てられて独り立ちしたのだろう、と勘違いした。あまり女性に氏素姓をねちねち尋ねるのは気が引け、そう理解しておく事にした。この誤解は一見、真実よりも筋が通っているため、ルークが誤りに気づくのに暫く時間がかかった。

「俺は、これからどうなるんだ。ガイドに狙われたら、故郷に帰れねえ」

「絵を持ってないルークは、もうガイドに狙われないわ。彼らが欲しかったのは、国境の死角だったから。解読できる頭を持ち合わせていないあなたを殺しても、足がつくだけ。彼ら、そこのチンピラと違って、頭もプライドもあるから無駄な殺しはしないでしょ」

ルークは、自分の心臓が二段下に降りた気がした。一時は死の瀬戸際にいたせいで、鉛でできた男のタマも圧殺されそうな思いだったのだ。エミリーは、面白おかしくルークの変貌を見ていた。やはり魔術師たる魔女は、人を弄るのを楽しむ質らしい。

「ねえ、せっかくのデートなのよ？もう少しラフな会話できないの？」

男なら女をリードしてみなさい エミリーの目が挑戦的だ。
ルークは、女性経験が少なく、妻子も恋人もいなかった。年甲斐も
なくどきまぎしていた。

容姿も人並みなヒロインの理不尽なピンチに颯爽と駆けつける
美しいヒーローが現れて、恋に落ちる話は、ルークも子供時代に読
んだ。 でも、それは女が男にじゃなかつたっけ？ 絵になる
のは、可憐なヒロインだ。決して髭の生えた三十路突入のオッサン
ではない。心中穏やかでないピュアな男性のハートを見透かすかの
ように、絵本の王子様、もとい魔女は意地悪い笑みを浮かべていた。

「本当に面白い人ね。二言三言でそう頭の中をグルグルさせている
人、見たことないわね」

年上の威厳は宇宙の彼方に消えてしまったようだ。 もっとも、
エミリーは年で接し方を変えるタイプではない。

「じゃあ、ナブーの名前と趣味は？」

「名前は……、多分エミリー」

多分？

「戸籍上の名前はエミリーよ。育て親はそう呼んでいたし。でも、

私の洗礼名、つまり真名を知らないの。おかげで、契約魔術が使えなくて大変だったの」

忌み子にせよ真名を教えないとは不憫でならないな、とルークは同情した。故郷のアストラスでは魔術師は珍しかったが、ファナリスでは神官も魔術師も多いらしい。

「でも、かえって契約魔術が使えなくて良かった。もし、使えたら間違いなく……」

指をパチンと弾くと、音もなくエミリーの背後に清楚なエプロンドレスの少女が現れた。ボブヘアで愛くるしく、人形のようにかわいらしかった。

「この子と同じ運命を辿ってたでしょうね」

エミリーがくいつと指を動かすと、ボブヘアの少女は一切躊躇せず胸のボタンを外し、首元と胸の間をはだけた。そこには奇妙な紋様と数字が描かれていた。

【SANITY 00】

焼きゴテで付けられた言葉は、ルークに不吉な予感を与えた。直

感的に理解したが、頷きたくなかった。なぜアストラスで魔術が御法度なのか、それが目の前にいた。自分を理不尽から救った理不尽な力は、そんな安易に使っていい類ではなかったのでは。そう考えると、寒気がした。

「契約魔術をすると、悪魔に魔力を貯める器を貸してくれるの。魔力の蓄積量が増えて、三流が一流の魔術師に早変わり。魔力量増大の地味で血反吐吐く努力をしなくても、火力の大きい魔術が簡単に使えるの。それに、ある程度成長すると寿命が止まって外見が変化しなくなる。いわば、良いとこどりの不老不死って感じね。この都市の上層部は危険性を黙秘して、契約魔術を推奨してるわ。契約魔術の代償、サニティを消費するなんて一言も言わずに魔術学校の先生は生徒に契約させるの」

「サニティってなんだ。そのゼロと関係あるのか？」

ずっとエミリーが首を横に振ると、そのメイドはプリセットな笑みを貼り付けたまま、ボタンをかけ直した。胸元を全く見ていないよく観察すると、笑っていても目の焦点がここにはない。薄目になっているだけで、目は笑っていない。

「代償のサニティは、最初は100から始まるの。そして、悪魔から借りた器で魔力を消費した分、メーターは少しずつ下がっていくの。初めは使う魔術がへばいからどうって事ないんだけど、学年が上がるに従って使う魔力量は増えていく。地道に素地を慣らしていない生徒は、すぐに魔力が不足してレンタルタンクに頼っていく。段々減っていく数値に普通は恐怖するでしょう。でも、サニティが減るにつれて、その子もオカシくなっていく。数値がどれだけ減る

うが気にせず、浪費を厭わず、言動や行動が不可解になっていく。その子の最期には……、様々なパターンがあるけど、ほとんどバッドエンドね」

労働奴隷エンド、性奴隷エンド、見世物奴隷エンド、どれでも好きなものを選べるわ、とエミリーは付け加えた。肉体が保存された【SANITY 00】の魔術師は、自ら歩くこともできず、人形のように動けない。食事や排泄も必要とせず、ただ肉体の制御がなくなった精神の塊に成り果てるのだ。もちろん魔術を自分から使えず、従順に全ての呪いを受け入れる。一度服従の呪いをかけられたら、どれだけ拒否しようが体は主人の指示通りに動いてしまう。

このメイドを見る限り、写真だけなら素晴らしく可愛いと思えるだろう。細やかにうごく仕草も、切なげに憂いを帯びた瞳に一縷の涙を浮かべて、今にも決壊しそうな涙腺をぐすつと鼻を少し吸って抑えている表情も非常に人間的で、いや、人間なのだが、リアルだ。だが、これが魔術師の末路で、エミリーの操り人形になっているのを認識すると、変な妄想がルークを襲ってくる。

例えば、自分が気に入っている芝居の役者や紙芝居のヒロイン・ヒーロー、もつと拡大すれば自分が接する近所のおじさん、酒飲み仲間、肉屋のおばさん、難癖つける金持ちオヤジ。自分の人生全ての登場人物が、完璧な振る舞いを演じる【SANITY 00】の魔術師だったら。

成り立たない道理は理論的にはない。自分の見えない舞台裏で息

もせず、意志の光もなく、屹立に整然と出番を待っていても、おかしくはない。

「この子に限らず、魔術学校は平民の出がほとんどよ。私は微妙な立場だったから気にしてなかったけど、それが鼻持ちならない貴族がいたわ」

しかし、そんな人形量産の術などすぐに反発されて禁制になりそうなものだ。

「契約魔術で、ファナリスは都合の良い労働力が欲しかったの。六天貴族と一般貴族は、魔術とは代償が違う聖術を使うから代償の餌食になる人は少ないわね。まず契約魔術の恐ろしさを知ってるし、魔術を下賤の技と見下してるしね。魔術を学ぶ貴族もちょっと珍しい庶民の技を身につけるだけで、リスクが高くなる程魔術を学ばずに聖術に切り替えるわ。器を使う分には同じだから、切り替えも楽ちんなの」

「はじめから聖術習わせりゃいいじゃねえか。帰ってこないのを親が気づかないはずないだろ」

残るはデザートになり、複数のメイドが皿の残骸を黙々と片付けていく。エミリーは、サクツとスプーンをシャーベットに突き立て、おいしそうに口に持っていく。

「甘いわね。内壁は情報封鎖のためにあるのよ。自分の娘が貴族の

奉公に勤めて定期的に仕送りしてくるのを悲しむ親がいると思う？」

当たり前前の反応で返され、ルークは沈黙する。食はそれでも止まらない。グラタンの味も、ステーキの味も最高だった。自分はオカシいのだろうか。

「それに、努力で伸びる魔術に比べて、聖術は才能オンリーなの。信仰心と修練も一応いるけど、聖術の力量は血で決まってくる。ぶっちゃけて、六天貴族以外はたいした力を持ってないわね。たしか今の大司教は六天貴族の一、調伏のチェンバレン家と極東の巫女のハーフだったかしら」

「怖い二つ名だな。その大司教もかわいそうに」

実際、ルーフェスは神官時代にからかわれていた時があった。しかし、心優しいルーフェスにはのれんに腕押し。そのような些事に思考を割くのは人生の損失です、ときつぱり言い放ったようだ。

「まあ、それはいいとして。幸い人形にならずに済んだ私は、趣味の読書が活かせそうな職業に就いたってわけ。本の探偵って結構、金になるのよ。私が扱う商品はどれも一冊で小さな町は買えるくらいだから、それなりに節制すれば贅沢に暮らせるわね」

古美術商の一つであるビブリオ・ディテクティブは、エミリーが言うほど楽々儲けられる仕事ではない。その古書の製本形式、紙やインクの材質、使用言語を大まかに把握できる知識かコネを持ってお

り、どこの誰が所有しているか嗅ぎ回る能力が不可欠だ。エミリーは自分の特殊性から過程をすつとばして結果にたどり着いている。あとは、所有者の機嫌を損ねずにどれだけ安値で買い叩くか、だけに限られてくる。

「けっこう飛び回るんじゃないか、それ」

「うん。迷宮に飛び込んだことがあるし、ドラゴンの巣を荒らしたこともあるわ。一遍ドラゴンにお尻をローストにされて死にかけた時は、今でもぞつとぞつとする」

「聞いてることちがぞつとぞつとするぞ」

赤いワインを飲み干すと、エミリーはひじをテーブルにつけて頭を抑えた。ルークは突然暗くなる魔術師に困惑した。

「私も人の事言えないわね。重い話に流れちゃう」

「いや、尋ねたのは俺だし、責任ないだろ」

「ホントに？」

酒で酔いが回っているのか、少し潤んだ上目遣いでルークを見てくる。

ルークのサニティに100のダメージ！！

「ノーカンで」

「……。そうするか」

気を取り直して、お互い椅子に座りなおした。エミリーはヒールでカツンと床を鳴らすと、白黒の大理石の床が鈍く振動して、黒い円タイルが一枚せりあがってくる。柱には金属製の仕掛け扉があり、そこから地下に続く階段に入れるようだ。

「私自身も読書中毒の愛読家で、こうして置いておきたい本を入れておく地下スペースも造ってみたのだ」

どうだすごいだろ、ヒールをなめろ、と言わんばかりにふんぞり返る姿は、焦る心を隠そうとする反動なのかもしれない。ルークはなるべく冷めた目で穏便にスルーしてあげることにした。人は完璧な生物ではないのである。

エミリーが立ち上がって扉に近づき、ルークに手招きする。ルークとそばにいたボブヘアのメイドが扉の前に立った。エミリーは印を素早く刻みながら、神官が聞いたら卒倒しそうな合言葉を紡いだ。

【この世の辛い試練の先に、あの世の退屈な独房が待っている】

ガチャリと重苦しい錠前が開く音がし、黒い鋼の扉が開かれる。つんと甘ったるい香が鼻をくすぐり、ほこりっぽい臭いがのどをくすぐる。この香は書庫でよく使われる保存用の薬品で、害虫や湿度対策に便利な一品だ。細い螺旋階段を降りて薄暗い広間に出ると、よく整頓されて埃もなく、保存状態の良い本棚が陳列していた。先頭のエミリーが指先に光を灯して、奥に入っていく。

「ざつとどれくらいあるんだ」

「えっと、西方書だけなら二千冊くらい」

個人所有にしては多いかもしれないが、蔵書家にしては少ない。蔵書家では二十万冊以上保有するのは珍しくない。

「そんなに持つてても一回きりでしょ。何度も読んどきたい本だけ置いてく主義だから、これでも整理がついていない山積状態なの」

「貴族なら領地収入があるだろうに」

「都市部に住む一般貴族は領地を持たないわ。その代わりに、水道や土木みたいな生活に必要な経済活動に関わって定期収入を得てるの」

「さっきの人形のくだりさえ聞かなければ、ファナリスが健全に聞こえるのにな」

「あゝ、もう。話蒸し返さないで」

一番奥に突き当たると、人一人が入れる位大きめのガラスケースの中に赤い光を放つ魔方陣が描かれていた。正十二角形の頂点と中央に、それぞれ魔導書が置かれている。エミリーは愛しそうにガラスケースに繊細な指を這わせ、声をくぐもらせる。

「待ってて。もう少しだから」

居たたまれない気持ちになり、ルークは黙って一歩下がった。か弱そうな少女が真剣な眼差しで誰かに語りかけているのを見ると、胸に重い何かを詰めた気分になるのだ。膝を着けて見えない誰かに向けて静かに祈るエミリーは、この時だけは聖女に見えた。

「ねえ、明日の見出しどうなると思う？」

「考えたくもねえな。いつだって最悪の予想はしとくもんだ」

階段を上がっている最中、手持ち無沙汰にエミリーはルークと話している。なにか思いついたように、エミリーはにんまり笑う。

「絵画泥棒、盗んだ絵画を郵送で返す。その心は」

エミリーはニヤニヤして、ルークの返事を待っている。ここは人生の先輩として失敗できんな、と無い頭を引っくり返して考えた。

「屠所（図書）の歩みは歳月の音」

おみごと、とエミリーはぱちぱち拍手した。柄にもなく格好をつ

けた冗談に、ルークは頭を掻いた。長年だらだらと生きてきた中で、これほど死に近づいた一日はない。この少女がいなければ、今頃屠殺される羊のようになっていただろう。品物を紛失したために利益はゼロになってしまったが、命があれば何度でもやり直せる。

照れくさい気分になっていたルークは、突然ある重大事に気づいて恐れおののいた。

「んっ、どうしたの」

「あ、いや、えっと……、いまさらなんだが」

じれったい返事にエイミーが催促する。ルークは齒切れ悪く答えた。

「俺、ずっと貴族とタメ口聞いてた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0054ba/>

ビブリオ・ディテクティブ

2011年12月31日01時46分発行